

平成 29 年度防災教育・復興教育推進事業（いわての復興教育スクール）成果報告書

学校名：岩手県立高田高等学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校で実践している復興・防災教育の一環として、避難所生活を想定した際の大量給食の意義について学ぶ。また講師を招聘し、震災時の避難所運営や食事面での留意点等、具体的な取り組みについて紹介していただく。

II 取組の概要

- 1 「大量給食の意義と実際」
豚汁（豚肉、白菜、にんじん、大根、ネギ、こんにゃく）
 - 2 経過
- ◇1 学年家庭クラブ委員の準備作業開始（実習棟）
- (1) 豚汁を作る
 - (2) 2・3校時を公欠とする
- ◇防災講習会（第1体育館）
講師：佐藤一男氏（防災士、米崎町在住）
- (1) 全校整容点検時の隊形とする
 - (2) 各クラス2名の配膳係による準備作業開始（実習棟）
 - (3) 配膳係は外靴を用意する
- ◇大量給食の配給開始（実習棟→第1体育館）
※正副担任
- (1) 各クラスの先頭に鍋を用意し、係が配膳する
 - (2) 一方通行で配膳する（受け取ったら列の最後尾に移動）
 - (3) クラス毎に食事をする
 - (4) 生徒はおにぎりなどを持参する
 - (5) ゴミの分別をする

III 取組の成果と課題

県が推進する「いわての復興教育スクール」活動の一環として、およそ1年かけて案を作り、通常の避難訓練とは別の形で行うこととした。

当日は1年生の家庭クラブ委員9名が、担当職員の指導のもと10時頃から約600食の豚汁を作り始めた。海洋システム科に設置されている大型の圧力鍋を使い、実際の避難所生活を想定した炊き出しを行った。委員以外の生徒は12時から地元の防災士として多方面で活躍されている佐藤一男さんをお招きして、東日本大震災での避難所運営と食事面での留意点などの講習を注意深く傾聴した。生徒や教職員の中には実際に避難所での生活を経験した者もいる。いつ何時そのような状況になるかわからないからこそ、常日頃から災害に備え、行動パターンや役割分担を明確に決めておくべきだと改めて感じる契機となった。

今後も様々なケースを想定した訓練を継続するとともに、被災校としてその成果を広く発信していきたい。

【写真1 調理の様子】



【写真2 圧力鍋を使用】



【写真3 配給の様子】



【写真4 講演会】



【写真5 食事の様子】



【生徒の感想から】

- ・震災時に役に立たない仕事はないと感じた。
- ・地域の方々がわたしたちを支えて下さっていることを知って感謝の思いが強くなった。
- ・近所付き合いによってたくさんの利点があることを知った。
- ・わたしが過ごしていた避難所は少人数だったが、大所帯の避難所は大変だったと改めて知った。
- ・普段の何気ない生活が本当にありがたい。
- ・災害時の食事の重要性を身にしみて感じた。

- ・普段からの備えが大切だ。
- ・防災対策もそうだが、災害を最小限にとどめる工夫も必要である。
- ・温かい食事に感謝です。
- ・コミュニケーションが大切である。
- ・支え合い、助け合いの精神を持って生活したい。
- ・避難所生活における衛生面はとくに注意が必要だ。
- ・栄養バランスも配慮しないとイケないが、なかなか難しいのが現状である。
- ・「そなえる」ことを考えて生活したい。
- ・備蓄をゼロにしないローリングストックを家でも実践しているので継続したい。
- ・震災を経験した一人として、各方面に伝える義務があると思う。
- ・不便な生活の中にも、水の確保やトイレなどはしっかりと整備したい。
- ・調味料の備えも大切だ。
- ・伝えること、共有することが大切である。
- ・支えてもらった分、今度は僕たちが高齢者など地域の方々を守っていきたい。
- ・支援物資のおかげで生活ができたので、感謝の気持ちを忘れずに生活していきたい。
- ・近所の方々の家族構成や性格などを知っておく必要がある。いざというときに役立つから。
- ・将来リハビリの仕事を考えているので、災害時にどう支援できるか考えていきたい。